

「神は、あなたの神」

ルカによる福音書 20章27節～40節

説教 鷹澤 匠牧師（大和キリスト教会）

復活ということはないと言い張っていたサドカイ人のある者たちが、イエスに近寄ってきて質問した、「先生、モーセは、わたしたちのためにこう書いています、『もしある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだなら、弟はこの女をめとって、兄のために子をもうけねばならない』。(27節～28節)

サドカイ人と呼ばれる人が出てきます。彼らは当時、裕福な人々によって作られた保守的な信仰のグループでした。モーセ五書だけを聖書と認める人々で、死者の復活を認めません。何故なら、そこには復活のことが記されていないからです。申命記に記されている“掟”を持ち出します。夫に先立たれた女性が社会的に不利な立場に立たされることから、その兄弟が彼女を引き取る。と、定められていたのです。これは、女性を守る“掟”で、もし、兄弟が拒めば、“恥さらしの家”と呼ばれ、社会的制裁を受けました。

しかし、彼らが問うた七人の兄弟の話は、イエス様を困らせるためのものでした。「復活が無い」と主張する自分たちの立場を擁護したかったのです。質問や議論の形を取っていますが、要は、「自分たちの語っていることが正しいでしょ」と言いたかったのです。下手をすると、私たちも、このような物の考え方をしてしまうのではないのでしょうか。

私には、神学生時代にそういう経験があります。議論のためだけの議論、理屈のためだけの理屈のような質問を青年会のメンバーから受けることがありました。私は、段々と気づいていきました。そこには、共通点があったのです。それは、「自分がいない」という点です。自分は蚊帳の外にいて高い所に立ち、見下ろすように、ものを語っているのです。要は、「ほら、自分の方が、正しいでしょ」と言いたいのです。そこには、命が無く血が通っていません。

サドカイ人の話もそうです。女性の苦しみや夫の兄弟の苦悩が考慮されていないのです。冷たい話をするのです。それは罪であり、愛がありません。イエス様もそこを深く憐れまれて、「この世の子らは、めとったり、とついたりするが、かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついたりすることはない。彼らは天使に等しいもの

であり、また復活にあずかるゆえに、神の子でもあるので、もう死ぬことはあり得ないからである。」(34節～36節)と、言われます。天ではめとったり、とついたりする必要が無い。天においては“神の子”という身分をいただけると言われるのです。これ以上のものはありません。

そして、イエス様は、死人がよみがえることは、「モーセも柴の篇で、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。」(37節)と言われます。この言いまわしは現在形です。今も、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神ということです。この地上にいない3人が、今も生かされているという意味なのだとされるのです。人は皆、生きている者も死んだ者も神のもとで“今”生かされていると言われるのです。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神なのです。

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。私たちはここに、自分の名前を入れることができます。神は、私たちの神にもなってくださったからです。罪人の私たち。神の御前で、罪深い者。しかし、その私たちのために、イエス様は十字架についてくださったのです。イエス様が身代わりとなって、十字架で死んでくださった。ゆえに、神は私たち一人一人の神となってくださったのです。私たちは神のもとで生きる。死んでも生きるのです。神は、死を超えてとこしえに、私たちの神でいてくださるのです。

『イエス様の答えを聞いた律法学者たちは語りました。律法学者のうちのある人々が答えて言った、「先生、仰せのとおりです」。彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。』(39節～40節)。「仰せのとおり」。これは、聖書が元々書かれた言葉では、「よい答えです」、「美しい答えです」とも訳されます。そして、「先生、なんて慰めに満ちた答えなのでしょう！」とも訳せるのです。この慰めのもとで、私たちは生きる。この慰めのもとで、私たちは、生かされる。しかも、それは、「死を越えて、とこしえに」であります。

(記 説教要約奉仕者)